第七講　論理的文章の読解⑥

Step 1

一　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ⓐ

新しいことを発見する力をつけるには、いま、専門の本だけを読んではいけないのである。いろんな本を、手当たり次第読む。乱読である。そうすると、読む側の頭に眠っていた関心とひびき合う考えに、偶然の出会いをする。まず、何より不思議な喜びを覚える。おもしろいと感じる。新しいものを見つけたという気がする。

これが、小さいながらセレンディピティである。自分の専門とする分野の本を読んでいたのでは決しておこらないことが、乱読で得られる。

近代の人間は、日本だけでなく、どこの国においても、活字の方が話すことばより、高級であるという考え方にとらわれている。学問のある人間は、本を多く読んでいる。学問のない人、本を読まない人は、耳学問だといって軽蔑（けいべつ）される。

頭のはたらきから言えば、話すのは書く以上に難しいらしい。ただ、書くには読み書きの技術を学ぶ必要があり、かつてそういうことを学ぶ人が少なかったため、多くはあきらめたのである。

知的活動として話すことはきわめて重要なものである。ときには、文章を書く以上に価値のあることもある。活字文化によってそのことがかくれてしまってきたのである。

話す、といっても、ひとりごとは別である。ひとりごとは、ことばらしいことばではない。相手がいるときの話は力をもっている。話すことばによる知的活動は、文字表現を支える論理とは異なるルールを求める。それを結晶させたのが、弁証法（注①）と呼ばれる。これは、独語（注②）、執筆にあたっての個人的なことばでなく、コミュニケーションをベースにしていて創造的である。

三人以上が集まって話し合う、おしゃべりをするというのは、いかにも低次に生活的で、知的活動とは考えられないのが普通である。おしゃべりはムダ話としてバカにされている。

果たしてそうであろうか、と考えるところから活字文化とは違った新しい文化が生まれる。

数人のものがクラブ(注③)のようなものをこしらえる。めいめいが違った仕事、専門をもっていることが望ましい。同業者だけというのは多く不毛である。異業種の人ばかりの集まりだと、めいめいが思う存分なことを言える。ときには自分でも考えたことがなかったようなことが、座の㋐雰囲気にあおられて飛び出すかもしれない。これも、セレンディピティの一部だったりする。

ひとりひとりの言うことは、形式的論理(注④)などは関係のない思考の㋑だんぺんである。同席の人たちがめいめいそういう点のような思考をふりまくから、［　　］小世界がひらける。いろいろな種類のアイデンティティ(注⑤)の星のかがやく夜空のようだと考えられる。半分は意識下にあった関心も星のように飛び出るかもしれない。それが偶然に結び合って、爆発するということがおこる。

知的雑談でするどい興味をかき立てられるのは、小さなセレンディピティがおこっているのである。そういうセレンディピティなら普通の人間でもときどき経験することができる。「きょうの会、おもしろかった。」とつぶやくようだったら、小さいながらセレンディピティがおこっていたのである。

乱読のセレンディピティがあると同じように乱談にもセレンディピティがある。

（外山滋比古（とやましげひこ）「聴覚思考」より）

（注）① 対話や弁論の技術。
② ここでは、ひとりごと。
③ 共通の趣味などを楽しむための集まり。
④ ここでは、結論に至るまでの道すじ。
⑤ 他とはっきり区別される個性。

問一　二重傍線（‖）部㋐の漢字に読みがなをつけ、㋑のひらがなを漢字に直しなさい。

㋐　　㋑

問二　次のア～エの文中の「の」の中から、本文中の波線（〰）部と同じ意味・用法のものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　月の沈むところを見る。　　イ　パリは花の都と呼ばれる。

ウ　彼女は本を読むのが速い。　　エ　雪の降る日はとても寒い。

問三　本文中のⓐで示した部分には、傍線（―）部の理由について、筆者の考えの要点が述べられている一文がある。その一文の、最初の五字を抜き出しなさい。

問四　次のア～エの中から、本文中の□の中に補う言葉として、最も適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　平然たる　　イ　必然たる　　ウ　整然たる　　エ　雑然たる

問五　次のア〜エの中から、本文の表現の特徴を説明したものとして、最も適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　全文を通じて、主語と述語、修飾語と被修飾語の倒置が多くみられる。
イ　文末の表現に常体を交えることなく、一貫して敬体を用いて表現している。
ウ　論を展開していく過程で、具体例や比喩表現を用いて説明を補足している。
エ　五音や七音の平易な和語を連続して用いることで、文章全体にリズム感を出している。

問六　筆者は、セレンディピティとはどのようなことだと述べているか。本文中で筆者が述べている、乱読と乱談のそれぞれによって生じることの共通点を含めて、五十字程度で書きなさい。

【静岡県】

Step 2・3

二　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

日常のことばにおいて漠然と論理と考えられているのは、話の筋道である。この筋道がしっかりはっきりしていないと、話が通じにくく、誤解をaマネきやすい。つまり、①「線」的なものである。線は、曲がったり、折れたりせず、まっすぐに一直線であるのが、明快でのぞましい、とされる。

ことばの送り手は、線のようなことばを並べ、つなげていく。それを受け手がたどって意味をとることになる。

その送り手と受け手が、心理的に近接、親密であるとき、形式の整った線的論理が情報過多と感じられるようになる。わかり切った、見当のつく部分を切りすてても伝達が可能になるだけではない。線がうるさくなり、部分的に省略、欠落させる。それが表現を引き締め、密度のあるコミュニケーションとして歓迎されるようになる。そこで線の部分的風化がおこる。

普通の線的筋道がこうして、だんだん短くなり、さらに、退化すると、点になる。線的論理がいわゆる論理であるが、②身近な同士においては、点的論理が通じ合い、おもしろくなってくる。

人と人との心理的距離が大きければ、用いられることばは、つよく線的な性格をおびる必要がある。bテンケイ的なケースは法律や法廷のことばであって、ことばはしっかりした線的筋道であるのが好ましい。線が切れたり、曲がったりしては、重大な誤解、混乱をおこすおそれがある。〝水ももらさぬ〟論理が求められる。

欧米語は、送り手と受け手が大きく離れている点で、特異なもので、法律の用語に通じるところがある。日本人が母国語では意識しなかった論理が気になったのはそのためである。もともと日本人は、ひどく立場の異なった人間の間での、コミュニケーションを考えることが稀（まれ）であったから、固い論理を考える余地がなかった。

> 家族の間で交わされることばは、法律用語とは大きく性格を異にする。法律のことばでは一から十をのべるのに、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十とすべての数をおさえなくてはならない。それに引きかえ、親しいものの間では、すべての点をたしかめるようなことばは、うるさく、わずらわしく感じられるのである。一、二とくれば、三、四とつづくだろうことを受け手は予想する。それをはっきり三、四とおさえると、わかり切ったことを言わないでほしいという気持を受け手ももつだろう。三、四を飛ばして五、六とし、そこでまた飛んで九、十に達する。それが省略と感じられないようになっているのが普通である。

家族は、もっとも親密な関係にある。形式的に整ったことばを口にすれば、おかしいと思われる。一、二とんで五、六とんで九、十といった省略でもなお、密にすぎる。一から十までと言えばたいていコト足りるのである。一から十でも、わかり切っていると感じるもの同士の間では、モノゴトをはっきり明示しないで、〝あれ、どうする〟と言うだけで相手ははっきりしたメッセージであると思うのである。

③つまり、論理は、人間関係によって、④密疎を異にする、ということである。人間関係の親密度が高まれば高まるほど、形式的論理の密度は疎になる。ある時点において、線としての論理が風化して、点に近づくと考えられる。

点的表現は点的論理を生む。それが線的論理にない、あたたかさ、含み、おもしろさをもつことが発見されると、省略の文化が生まれる。

⑤俳句は世界最小の詩と言ってよいであろうが、この点的論理なくしては存在し得ないことははっきりしている。十七音の小さな表現で、情感を伝えることができるのは、作者の力だけではない。受け手が、その点を結び、あるいは関係づけて、おのずからの理解を成立させるはたらきがないと、成立しない。

線的論理は切れ目がないのが当然とされるから、その線をたどっていけば、脱線ということはない。脱線すれば、受け手の責任であるとして責められる。線的論理の表現には正解があり、誤解がある。

それに対して、点的論理では、いわば、散乱し、切れている。筋道などあろうわけがない。したがって、⑥いわゆる正解は存在しない。

点的論理によって支配されていることば、表現は、必然的な論理、直結関係による意味とは違った情感的意味をもっている。

点的論理による表現は、連続していないが、それを結び合わせて複雑な図形のような意味を結ぶことができる。そうして切れているが、つながりをもつことのできる、非連続の連続が可能になる。線的論理では考えることもできない。

線的論理の表現には、正解が存在する。筋道を外れたら誤りであり、不可である。それに対して、点的表現では意味の c 半ばは、受け手に委ねられている。散乱しているように見える点と点の結合は、受け手の才覚次第である。十人十色の意味化があってもおかしくない。

（外山滋比古（とやましげひこ）「聴覚思考　日本語をめぐる20章」より）

Step 2

問一　＝＝線部a〜cについて、漢字は読みをひらがなで書き、カタカナは漢字に直せ。

a 【　　】きやすい　b 【　　】　c 【　　】ば

Step 2

問二　――線部①を説明したものとして最も適当なものを次から一つ選び、その記号を書け。

ア　送り手が、話を受け手に正しく伝えるために整えた筋道。
イ　送り手が、親しい受け手との間でのみ共有している知識。
ウ　送り手が、本心を遠回しに表現するために工夫した技法。
エ　送り手が、言葉を見ばえ良くしようと作った美しい表現。

【　　】

Step 2

問三　――線部②について、「身近な同士においては、点的論理が通じ合」うのはなぜか。本文の［　］で囲まれた部分の語句を用いて、解答欄に合う形で二十字以内で書け。

身近な同士であれば、受け手は［　］から。

Step 2

問四　――線部③の語のはたらきを説明したものとして最も適当なものを次から一つ選び、その記号を書け。

ア　これまでに述べてきた話題をまとめている。
イ　関係のある二つの事柄を並べて比べている。
ウ　前に述べたことと対立する内容を挙げている。
エ　直前で述べた内容に新たな事実を加えている。

Step 3

問五　――線部④と構成が同じ熟語を次から一つ選び、その記号を書け。

ア　公園　イ　豊富　ウ　表裏　エ　日没

Step 3

問六　――線部⑤とあるが、俳句が詩として存在し得るのは、点的論理に何がそなわっているからだと筆者は述べているか。――線部⑤より前の本文中から十五字以内で抜き出して書け。

Step 3

問七　――線部⑥の理由を説明したものとして最も適当なものを次から一つ選び、その記号を書け。

ア　点的論理の表現は、短く省略されたことばの中に作者の意図が巧妙に隠されているから。
イ　点的論理の表現は、受け手がどのように意味を結ぶかによって多様な解釈が可能だから。
ウ　点的論理の表現は、作者の意図を推測する手がかりがないため意味を理解できないから。
エ　点的論理の表現は、作者と受け手の解釈が一致しない限り本当の完成には至らないから。

Step 3

問八　本文の内容に合うものとして最も適当なものを次から一つ選び、その記号を書け。

ア　法廷のように人生に関わるような慎重な判断が求められる場面では、余計な情報を排除した明確な点的表現が用いられる。
イ　家族のように互いに親密な間柄では、年齢差があっても敬語のような改まった言葉ではなくて打ち解けた言葉が使われる。
ウ　引き締まった点的な表現を成熟させることで、形式の整った論理で成り立つ音数の定まった俳句を生むことにつながった。
エ　必然的な論理による表現は直結関係による明確な意味を持つため、誤解が生じた場合は受け手の側に責任があるとされる。

【長崎県】

第七講　論理的文章の読解⑥

Step 1

一

解答

問一、㋐ふんいき　㋑断片　問二、ウ　問三、近代の人間　問四、エ　問五、ウ　問六、乱読や乱談の内容が、意識下にある関心と偶然に結びつくことをおもしろいと感じ、新しい発見をすること。(49字)(同意可)

解説

問二、「こと」に言いかえられ、体言のかわりをする「の」。ア・エは「が」に言いかえられ、主語を示す。イは下の名詞につなげて連体修飾語を作る。

問三、「そのこと」は、「話すこと」が重要であることを指す。「学問のない人、本を読まない人は…軽蔑される」というように、話すことが軽んじられ、活字を読むことが「高級」であると考えられていたことをおさえる。

問四、「思考のだんぺん」を「めいめい」ふりまいていることから、いろいろなものが混じってまとまりのない様子を表す言葉を考える。

問五、「セレンディピティ」がおこることについて、「数人のものがクラブのようなものをこしらえる」という例を挙げたり、「いろいろな種類の…星のかがやく夜空のようだ」「星のように飛び出るかもしれない…爆発するということがおこる」という比喩表現を用いたりして説明している。

問六、「手当たり次第読む」という「乱読」で、「読む側の頭に眠っていた関心と…偶然の出会いをする」ことで「何より不思議な喜びを覚える…新しいものを見つけたという気がする」ことを、「小さいながらセレンディピティである」と述べている。「乱談」では、「自分でも考えたことがなかったようなことが…飛び出す」ことを「セレンディピティの一部だったりする」と述べ、「半分は意識下にあった関心も…飛び出るかもしれない」とたとえている。「乱読」と「乱談」の共通点をおさえてまとめる。

Step 2・3

二

解答

問一、a、招（きやすい）　b、典型　c、なか（ば）　問二、ア　問三、省略されている部分を予想することができる（20字）（同意可）

問四、ア　問五、ウ　問六、あたたかさ、含み、おもしろさ（14字）　問七、イ　問八、エ

解説

問二、「話の筋道」についてたとえている。

問三、「家族の間で交わされることば」は、間を省略してもそれに続くことばを「受け手は予想する」ため、「それが省略と感じられないようになっている」と述べていることをおさえる。

問四、「つまり」は、それまでのことを言い換えてまとめるときに用いる。

問五、反意の漢字の組み合わせ。アは上の漢字が下の漢字を修飾している。イは同意の漢字の組み合わせ。エは上下の漢字が主述の関係。

問六、「この点的論理」とあるので、直前の「点的表現は点的論理を生む…省略の文化が生まれる」ということに着目する。

問七、「点的表現では意味の半ばは、受け手に委ねられている」から、「十人十色の意味化があっておかしくない」と筆者は述べている。

問八、「線的論理は切れ目がない…その線をたどっていけば、脱線ということはない」ため、「脱線すれば、受け手の責任である」ことをおさえる。